

ざんざい かんざい
慚愧・歡喜の涙君

ご讃題 (Ref『浄土真宗の教章(私の歩む道)』生活』
親鸞聖人の教えにみちびかれて
阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ
つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに …(中略)…
御恩報謝の生活を送る。

一、 涙君さよなら(青年の涙君)

(浜口庫之助作詞・作曲、福永陽一郎編曲)

涙君さよなら さよなら涙君 また会う日まで
君は僕の友達だ この世は悲しいことだらけ
君なしではとても 生きて行けそうもない
だけど僕は恋をした 素晴らしい恋なんだ
だからしばらくは君と 会わずに暮らせるだろう
涙君さよなら さよなら涙君 また会う日まで

涙君さよなら さよなら涙君 また会う日まで
君は僕の友達だ この世は悲しいことだらけ
君なしではとても 生きて行けそうもない
だけど僕のあの娘はね とっても優しい人なんだ
だからしばらくは君と 会わずに暮らせるだろう
涙君さよなら さよなら涙君 また会う日まで
また会う日まで また会う日まで また会う日まで

二、 涙君なつかし(慚愧・歡喜の涙君)

(補作詞 堅田 玄宥)

涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には
君は僕の友達だ 私は愚かなものだから
君なしではとても 生きて行けそうもない
ある日僕は声を聞く 阿弥陀様の声なんだ
われをたのめとよばふ なむあみだぶと称える
涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には

涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には
君は僕の友達だ 私は愚かなものだから
君なしではとても 生きて行けそうもない
声聞くときの私はね 胸の奥から込み上げる
よろこびの涙君と 出遇いに酔いしれる
涙君なつかし なつかし涙君 また会う日には
また会う日には また会う日には また会う日には

(あとがき)年配の人なら今でも九ちゃんの声が耳元に残る「涙くんさよなら」、このほど南米開教区プレジデント・ブルデント本願寺とはすぐお隣の本願寺のお盆のご法座に出講した新発意のご法話の一部が本人のギター伴奏と共に You Tube の中から届けられました。

音楽をずっとやってきたこともあって、何とよい声なんでしょう。ご法話なのに、カメラを構えたお同行の姿、ひとしきり歌いあげるとライブ演奏に対してお聴聞のお同行から拍手がこぼれます。

若さのセンスでか、ご法話はとても分かりやすいお話でした。

ところで、もともと「涙君さよなら」は、若者の作品ですから「この世が悲しいことだらけ」というのもうなづけにはありません。けれども「この世は悲しいことだらけ」としたのでは、涙の原因を専ら自分の外に求めて、「涙は悲しいから出る」という平凡な記述に終わってしまいます。

「素晴らしい恋をしたから、しばらくは涙君と会わずに暮らせるだろう」というのも、全く若者らしい楽観主義に傾いてしまっています。

ここでの僅かな救いは「しばらくは」と断っているところでしょうか。

歌い終わってみると、歌の明るさとは裏腹に、悲しみと涙君との関わりの掘り起こし方が表面的でものたりないことでありました。

よって「涙君さよなら」には副題として「**青年の涙君**」を付しました。

さて、親鸞聖人は『一念多念証文』に第十八願成就文の註釈を施しておいでになります。

まず、「聞其名号」を釈して「本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききて疑ふころなきを「聞」といふなり。またきくといふは、信心をあらはす御のりなり。」と仰せであります。

その名号「南無阿弥陀仏」については、六字釈で「**帰命は本願招喚の勅命なり**」と仰せですから、「**名号をきく**」とは、南無阿弥陀仏と称えれば聞こえて下さる勅命そのものを疑いをさしはさまずに聞かせて戴くことであり、それがそのまま信心を表わしていることになることが分かります。

続いて「信心歡喜」の「歡喜」について、「歡」は身をよろこばしむるなり、「喜」はここちよるこばしむるなり」と仰せでありました。

そこで、「涙君さよなら」のメロディに乗せて、二番の歌詞として「**涙君なつかし**」を編んでみることにしました。

ここでは、副題として「**慚愧・歡喜の涙君**」を付しています。

阿弥陀様のみ教えに会い、光明に照らされるといふと、私自身の愚かさに目を開かれることになります。

そこで、「この世は悲しいことだらけ」と青年の涙君ではひたすら悲しみの原因を自分の外に向かって求めていたものを、如来様の光に照らされた私自身に焦点をあてた言葉「**私は愚かなものだから**」としました。

如来様から届けられていたお名号のおいわれは実は「ワレヲタノメと喚び続けていて下さった()如来様直々のお喚び声だったので。」

註「喚ばふ」の「ふ」は、「喚ぶの未然形」につく継続の助動詞です。

届けられたお名号は、阿弥陀如来が衆生の行として愚かな私に^{えせ}回施して下さったものですから、私は「**なむあみだぶと称える**」のです。

するとどうでしょう、私の声であって私の声ではない、阿弥陀如来直々のお喚び声がとうとう聞こえて下さるときがくるというのです。

その瞬間を「**ある日僕は声をきく**」と表現しています。

声は、阿弥陀如来の**本願招喚の勅命**でありましたから、勅命を聞いた瞬間、私は信心を頂戴しているのであります。

声聞く(信心を頂戴する)ときの私はどうかというと、胸の奥から込み上げてくる慶びの涙君と出遇っているのであります。

今は、ただその出遇いの歡びに酔いしれるばかりでありました。合掌

秋のお彼岸のご法座 九月二十日から、正覚寺は二十三日(水)
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六
☎-📧 mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥